

30D-am01

高齢者の術後せん妄における抗精神病薬の使用調査

○太田 かおり¹, 中村 正樹¹, 牧内 隆司², 森川 馨²(¹メディカル・データ・ビジョン, ²国立衛研・安全情報部)

【目的】高齢者における術後せん妄は外科治療において大きな問題となっている。一方、米国 FDA, EMEA 等海外の規制機関は、高齢者における抗精神病薬のリスクについて安全性警告を行っている。そこで、本研究では医事会計データを用いて、日本における高齢者の術後せん妄に対する抗精神病薬使用について調査を行った。

【方法】2003年1月から2010年9月の医事会計データ(1,000,932名;メディカル・データ・ビジョン(株))を用い、手術を実施した166,421名のうち、術後7日以内にせん妄<ICD10:F05>を発症し確定診断された患者と術後7日以内に抗精神病薬を処方された患者を対象に調査を行った。

【結果】手術を実施した166,421名のうち、術後せん妄確定患者は773名(0.46%)であり、また術後に抗精神病薬を処方された患者は3,985名(2.39%)であった。術後せん妄発症患者、抗精神病薬処方患者共に年齢に伴い増加し、高齢者での発症、及び高齢者で抗精神病薬が処方される割合が高かった。処方された抗精神病薬は、ハロペリドールが79.1%、リスペリドンが18.1%であり、注射剤が81.5%と多く用いられていた。集中治療室で21.5%が使用されていた。抗精神病薬の術後初処方日までの期間は手術当日が45.0%と最も高く、術後7日までに2.2%と減少していた。術後の使用の継続は1ヶ月で33.8%、2ヶ月で16.6%、3ヶ月で10.3%であった。

【考察】一般に高齢者は術後せん妄を発症するリスクが高いといわれているが、本調査でも術後せん妄は高齢者で高く、また抗精神病薬の処方も高齢者で多くなされていた。術後せん妄に対する抗精神病薬の使用は適用外であり、FDA から QT 延長等のリスクについて警告が出されているように、特に高齢者においては十分な注意と管理の下で使用される必要がある。